

序

1. 背景

1903年(明治36年)3月12日、河口慧海(1866-1945)はカトマンズで41部の梵語仏典写本を入手した。その中にこの紙写本(T8)が含まれていた¹。同年5月20日、河口は神戸に帰り、上京して麻布飯倉に寓居した²。南條文雄(1849-1927)がT8を借用して「ケルン・南條本」の校合作業を行ったのはこの頃であると考えられる³。なお、南條が序で書いているテキストの数(43)⁴と『河口慧海』の記述の梵語仏典写本の部数(41)⁵が食い違うのは、南條が、仏典挟みとチベット語「ミラレパ伝」を梵語仏典写本の点数に加えたからであろう。

河口は、翌年(1904年)10月11日神戸港から2回目のインド、ネパール、チベット旅行に出発した。彼は、ネパール、チベットでさらに多くの仏典・仏像などを入手し、その中の梵語経典を東京帝国大学(現東京大学)に送って保管を依頼した⁶。これらの梵語経典の大部分は、1903年に将来した梵語経典と共に1915年(大正4年)同大学に寄贈され⁷、現在東京大学総合図書館に所蔵されている。T8以外の梵文法華経写本もそこに含まれていたと考えられる。現在我々は、それらの梵文法華経写本の概要を松濤誠廉(1903-1979)のカタログによって知ることができる⁸。

2. この写本の特徴

この紙写本に関する松濤カタログの記述は次の通りである⁹。

No. 414

(1) Sad-dharma-puṇḍarīka-sūtra.

(2) Paper, 118 leaves, 8 lines, 19 7/8 x 4 1/4 inch., Kuṭīla, (ON. 62), (K). There is a picture of the Buddha with many attendants on the first folio.

(3) See No. 409.

この写本は、散逸した第107葉を除き、第119葉までが現存するので、合計118葉である。しかし、第119葉裏(119b)の最後で縁起偈が中断しているため、少なくともあと1葉はあったはずである。各葉の裏面の左端には葉の番号がシンボル文字¹⁰で表示され、右端には同じ

番号がネパール式数字で書かれている。それらの中でも第1葉裏 (1b) の左端のシンボル文字¹¹は特異で、筆者の知る限りこの一例だけの珍しい形である。このシンボル文字は、この葉が写本の1枚目であることを表わす¹²と同時に、一種のインヴォケイション (祈りの言葉) として読まれた¹³。このインヴォケイションは、ヴィシュヌ神の宇宙創造のエネルギーを象徴するものではないかと筆者は考える¹⁴。また、ヴィシュヌ神の妻となった女神ラクシュミー (シュリー、吉祥天女) を象徴するものではないかとも考える¹⁵。この文字のアヌナーシカは、ランジャンナー文字の楼閣文字 (kūṭākṣara) の上に書かれるシンボルによく似ている¹⁶。また、同じ葉の右端に書かれた“1”を表すシンボルも、この写本独特の形状をしている。

このシンボルの下の部分の śrī というインヴォケイションは他の写本にも見られる。例えば、貝葉写本Bの第1葉裏 (1b) の左端には、śrī e と書かれている。e は eka “1” を表す¹⁷。ユージェーヌ・ビュルヌフ (Eugène Burnouf, 1801–1852) が仏語訳の底本として使用した紙写本P3にも多くの śrī が見られる¹⁸。それは、第2–69葉、71–90葉、92–102葉、117葉のそれぞれの裏面左端の葉番号を示すシンボルの上に書かれている。

このようなインヴォケイションは、法華経の写本に限って言えば、紙写本に多く見られる。例えば、紙写本 T3 には、葉番号を示すシンボルの上にアヌナーシカが書かれている葉もあれば、小さな点が底辺から6個、5個、4個、3個、2個、1個とピラミッド形に数字の上に重ねて書かれ、その上の点が、T8のアヌナーシカのごとく、天空に昇っていくように描かれている葉もある¹⁹。このピラミッド形は、ヴィシュヌ神の持ち物の一つであり、知識と弁舌の能力、吉兆と多産を象徴する螺貝 (śaṅkha) と似ている²⁰。また紙写本C1には、葉番号を示す数字の上に guruḥ と書かれている。guru- (宗教上の師) は、ゴーラクナートゥ派の人々が特別な意味を込めた言葉である²¹。この宗教は、仏教とシヴァ・シャクティ派の混合宗教であり²²、ネワール人の信仰に大きな影響を与えた²³。C2, T5のように、葉番号を示す数字の上にアヌナーシカが書かれている紙写本もある。しかし、それがすべての葉に書かれているわけではない。またT4には、葉の裏面の左上欄に書かれた葉番号を示す数字の上に saddharmapu- と書かれ、同じ葉の右下欄の葉番号を示す数字の上に puṇḍarīkaṃ と書かれている。

松濤カタログによれば、T8 写本の文字はKuṭīlaとなっている。これは、後期リッチャヴィ文字のことであり²⁴、リッチャヴィ王朝時代 (4世紀後半–8世紀)²⁵、主に碑文に使用された書体で11世紀頃まで使用されたものである²⁶。筆者は、T8の書体をランジャンナー文字と考えている。第119葉 (119b) の最後の行が縁起偈の途中で終わっているため、この写本の書写年は不明であるが、著者は17–18世紀に書写されたものと推定する。

注

1. 河口 (2000, pp. 133, 143, 297).
2. Ibid. (p. 135).

3. Kern and Nanjio (1908–1912, p. II).
4. Ibid.
5. 河口 (2000, pp. 143, 225).
6. Ibid. (p. 156).
7. Ibid. (p. 225).
8. 松濤 (1965, pp. 146–148).
9. Ibid. (p. 147).
10. 若干の異同はあるが、Śākya (1973, pp. 79–80) の表のシンボル数字と同じである。
11. Plate 1 を参照。
12. Bendall (1883; 1992, Letter-numerals, plate V), Śākya (1973, p. 79), Sarkar and Pande (1999, p. 42) も参照のこと。
13. このインヴォケイションは śrīm̐ とローマ字に表記できるが、当時の人々が実際にどのように発音したかについて、筆者は正確な結論を導き出すことができない。Allen (1953, pp. 39–46), Varma (1929, chapter IX, The Anusvāra), Warder (1967, §70) を参照。
14. Gonda (1954; 1969, chapter II: Śrī, pp. 176–231) を参照。
15. 上村 (1981, p. 226).
16. Śākya (1973, pp. 37–38).
17. Śākya (1973, p. 80), Bendall (1883; 1992, plate V) を参照のこと。
18. Burnouf (1852; 1989, p. 285).
19. 戸田宏文教授所有の紙写本C1, C2, T3, T4, T5 の製本コピーを拝見した。感謝いたします。
20. 上村 (1981, p. 218), Gonda (1954; 1969, pp. 100–101, 220), Sarkar and Pande (1999, pp. 60–62).
21. Wright (1877; 1990, pp. 140–141).
22. Mishra (1993; 1999, pp. 19–20).
23. Nepali (1965; 1988, pp. 315–321).
24. Śākya (1973, pp. 16–21).
25. Petech (1984, p. 21).
26. Malla (1982, p. 28).